

マイ ストーリー My Story

— ビーザ チェンジ プログラム ウィメン インザ ワールド サミット — — Be the Change Programme • Women in the World Summit —

奈良県第 51 団 レンジャー2年 河村幸音

派遣の概要

まるまる一週間も学校を休み、私はいったいロンドンで何をしていたのか。

世界を変えるための力をつけてきました。

10ヶ国（イギリス、アイルランド、オランダ、ドイツ、アメリカ、香港、日本、オーストラリア、ブラジル、アルゼンチン）から集まった23人は、未来のチェンジエージェント。総合化粧品会社ダヴ (@DoveUK) がメインスポンサーのイベント「世界の女性サミット (Women in the World)」 (@WomenintheWorld #WITW) に、世界のガールガイド・ガールスカウトの代表、そして次世代のアンバサダー「ジェネレーションガール*」として参加してきました。

世界の女性サミットは、世界中さまざまなフィールドで活躍している女性が集まり、自身の意見や経験を語るイベントです。第1回は、2010年にアメリカで開催され、ロンドンでの開催は今回が初めてでした。創始者はイギリスのジャーナリスト、ティナ・ブラウンで、ニューヨーク・タイムズ（アメリカのニューヨーク州に本社を置く新聞社）がビジネスパートナーです。ステージの上で話をするのは約60人で、ほとんどが女性でした。マララさんのご両親や、メルル・ストリープなど有名な方もたくさんいました。シリア難民の方や、エボラ出血熱にかかって回復した方などもいました。聴衆は約400~500人だったと思います。女性の方が多い印象でしたが、男性もたくさんいました。

10月5日にロンドンに到着し、6日の夜からプログラムがスタート。といってもその夜は仲良くなるためのパーティーでした。

7日と8日はDoveのプロジェクト(Dove Self-Esteem Project)、そしてDoveとガールガイド・ガールスカウト世界連盟(WAGGGS)が提携して行っている「大好きなわたし」(FreeBeingMe)の研修などがありました。これが、Dove主催の“Be the Change Programme.” ジェネレーションガールのために開かれたもので、8日夜から始まる世界の女性サミットに向けて、どんな姿勢で参加すればよいのか、サミット



「#nolikesneeded」「いいね！」の数は自分の価値じゃないというカードを持ち SNS で発信。世界の女性サミット創始者である、イギリスのジャーナリスト、ティナ・ブラウンと参加者とともに写した1枚

中に自分たちがしなければならないことは具体的に何なのかなど、いろいろな方のプレゼンテーションやワークショップを通して明らかになっていきました。日本でもよく言われる「次世代リーダー育成プログラム」の究極の形だと思いました。



10月7日

Be the Change Programme にて。ガールガイド・ガールスカウト世界連盟のCEOの方から、国連総会で採択されたSDGsについての説明を受けました。英語が速すぎてついていけず、早くも心が折れそうでした。



8日の夜と9日は本番、世界の女性サミット！これは本当に素晴らしいイベントです。世界のトップの女性リーダーがたくさん集まって、ステージの上で対談形式の話をする。

私たちは何度も言いますが次世代の少女と若い女性の代表ジェネレーションガール。スポンサーのフリーパスを首に下げた私たちの顔は誇らしげで、すごくキラキラしていたと思います。

心に響く刺激的なお話をたくさん聞いて、リアルタイムでその場で発信する“LIVE TWEETING”や（私は英語をすばやくきっちり文字に起こす能力がなかったため、ほかのメンバーや公式アカウントのツイートをひたすらリツイートしていました）、休憩時間やサミット終了後には一人ひとりが自分で選んだスピーカーにインタビューを行い、受け身ではなく積極的に参加していくスタイルでした。

10月8日

ひき続き Be the Change です。やっとみんなを仲間だと認識しはじめました。英語からも逃げないように努力しました。この写真は、演劇学校の先生からプレゼンテーションの指導を受けたあとです。



イギリスの歌手 Nina Nesbitt が私たちのために、自分の話をしに来てくださいました。

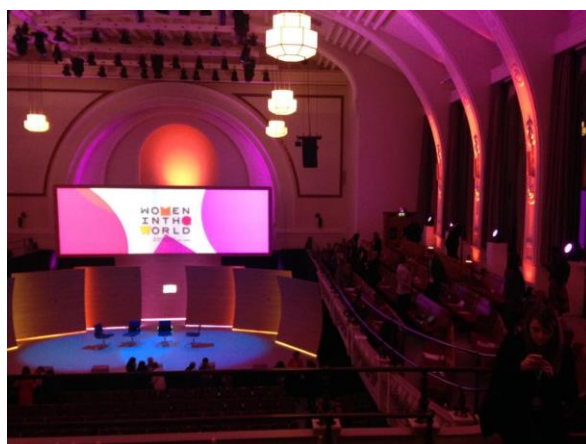
「自分がこうしてられるのは家族やファンのおかげ。私は音楽が大好きで、永遠に続けたい。人生は好きなことをして生きてほしい」などの言葉が印象に残りました。

10月8日夜～9日

ついに Women in the World Summit です。レッドカーペットの上を歩き記者とカメラマンに囲まれるという、おそらく人生で2度とない経験



2日目、イベント終了後のスピーカーの集合写真撮影の様子と、会場（Cadogan ホール）の中の様子。Dove の社長やイギリスのモデル、カーラデルヴィーニュなどからもメッセージをいただきました。



#NoLikesNeededのキャンペーンのパネル。Dove ラウンジと呼ばれる部屋があり、このコーナーではこのパネルをもって写真を撮り、SNS にこのタグをつけてアップロードします。「自分を好きになること。『いいね』の数はわたしの価値じゃない」



3日目にしてやっとみんなとの壁がなくなりました。この写真では左から、ブラジル、香港、ドイツからきたガイド・ガールスカウト世界連盟の仲間です。



アルゼンチンからの参加者と。



Polline Akelloさんとオランダのガイド



9日にはメンタリングランチという、世界中のさまざまなフィールドで活躍している女性とご飯を食べながら一対一で話をするという、非常に貴重な経験もさせていただきました。ジェネレーションガール2人に対しメンターが2人の4人で一つのテーブルに座りました。メンタリングランチの目的は、対談を通して、ジェネレーションガールがこれから世界を変えるための勇気をもらい、メンターの実際の活動や考え方からヒントを得ることでした。



メンタリングランチで、10歳の少女、Lauren Boyleさんと

私のメンターはイギリスの雑誌の編集長 Janine Gibsonさんと、ヨーロッパ デジタルガールという賞を2年連続で受賞した10歳の少女、Lauren Boyleさんでした。

Janine Gibsonさんは、私のつたない英語での話を親身に聞いてくれて、「いろいろな経験をしてきたのね。あなたはすごい人よ。あなたのお父さんお母さんはあなたを誇りに思っているから自信を持って。」と言ってくれました。すごくうれしかったです。モチベーションが、ぐんと上がり、そのあとの活動をさらに頑張ることができました。最高の人生相談でした。私はロンドンで、日本では絶対にできない経験をして、世界を変える力をつけました。

*ジェネレーションガールについて (Women in the World オフィシャル冊子より抜粋)

ジェネレーションガールとは、少女や若い女性が自分の可能性や能力を否定せず高く評価し、より高いレベルの行動を起こすことができるよう刺激を与えたり、励ましたりする運動です。ダヴの、自己肯定感を高めるプロジェクト (Dove Self-Esteem Project) との共同プロジェクトです。世界中の意識の高い少女や若い女性が、心の声を広く発信する機会を提供し、彼女たちに本当のロールモデルを提示します。この次世代の女性リーダーたちは、彼女たち自身の努力と成功、不安と希望について経験を伝えてくれることでしょう。ジェネレーションガールとダヴの自己肯定感を高めるプロジェクトは、作家や記者、文化的革新者から、起業家、技術者までにわたって、少女らがお互いに認め合い、一緒になって社会の変化に影響を与えられるように促します。ジェネレーションガールについてもっと知りたい方は、info@womenintheworldmedia.com にメールまたは公式ウェブサイト nytimes.com/womenintheworld をご覧ください。

ビーザチェンジプログラム Be the Change Programme 日程表

Agenda Day 1

9:00-9:15	開会[Welcome and opening remarks]
9:15-9:30	世界の女性サミットへの導入[Introduction to WITW (Marrisa Farina, Tina Brown)]
9:45-10:45	この世界のために私たちがすべきこと [Global Development Agenda for Girls (Anita Tiessen-WAGGGS)] ・SDGs について、MDGs からどう変わったか ・元ガールスカウトで、現在活躍している女性の紹介
10:45-11:15	休憩[Break]
11:15-11:30	ビーザチェンジサミットについて[Be the Change Summit Agenda]
11:30-12:30	コミュニティに衝撃を与える [Galvanizing communities for social change (David Wilding-Twitter)] ・Twitter の拡散力を、世界を変えるために生かす方法 ・イベントの間に行う LIVE TWEETING の効果と意味
12:30-13:30	昼休憩[Lunch Break]
13:30-14:30	正しいときに正しい情報を伝える意義 [Power of telling the right story at the right time (Farrah Storr-Cosmopolitan)] ・雑誌の記者の方。人に情報を伝えるとはどういうことか
14:30-15:30	意見交換[Get inspired by others] ・お互いの意見や考えのシェア
16:00-17:00	ビデオを使ったブログ[Vlogging (HeyHuman)] ・ビデオとブログを組み合わせる効果的に使う方法
17:00-19:00	夕食・移動[Wrap up, early dinner and transport to Southwark]
19:00-21:00	ロンドンツアー[Walk Tour: Fair Maids & Maidens] ・ロンドン市内の歴史ある場所をガイドさんと共に観光
21:00	ホテル着[Pick up and transport to the hotel]



Agenda Day2

8:30	ホテル出発[Pick up at the Hotel]
9:00-9:15	開会[Opening Remarks]
9:15-10:15	プレゼンテーション講座[The power of presence (RADA)] ・芸術学校の演劇の先生から、プレゼンテーションでの効果的な話し方のワークショップ
10:15-10:45	休憩[Break]
10:45-11:45	社会の変化を考える[Lobbying for public policy change] ・Edelman の社員の方が自分の考えを話し、それを中心に自由なディスカッションの練習
11:45-12:45	メンタリングランチについて[Mentoring and Mentoring Lunch Brief] ・メンタリングランチをする目的や趣旨の説明と、当日自分のメンターが誰なのかの発表、詳細連絡
12:45-13:35	昼休憩[Lunch Break]
13:45-14:45	メンタリングランチ準備[Rehearsals and practice] ・メンターについて調べたり、質問を考えて聞く練習など
14:45-15:00	休憩[Break]
15:00-15:45	容姿への自信に関する問題 [The issue of body confidence (Dr Phillippa Diedrichs)] ・Dove の Self-Esteem プロジェクトに協力している会社の方から、具体的なデータや情報の提供、質疑応答
15:45-16:30	容姿への自信を高めるプロジェクト [Body confidence & Dove (Meaghan Ramsey)] ・プロジェクトの目的についての説明、Dove が言わんとしていることはいったい何なのか
16:30-17:30	歌手に学ぶ自己肯定感[Nina Nesbitt - Her personal story] ・歌手として活躍している Nina が思う、容姿への自信を高めるにはどうすればいいかの意見 ・私たちへのメッセージ
17:30-17:45	最終打合せ[Final Briefing]
17:45	夕食後、ホテルに戻って着替え[Leave and transport to the hotel]
19:35	ホテル出発[Pick up at the hotel]
20:00-22:30	世界の女性サミット [Women in the World (Cadogan Hall)]
22:45	ホテル着[Leave and walk to the hotel]

一番刺激を受けたのは誰か Who inspired me the most

1. シリア難民の Mervat Alsman さん

「難民は、だれも望んで難民になったわけじゃない」「私は私の国を愛しています」「船はそれしかない、それに乗るしかありません。暗くて冷たかった」

どんなにつらい思い出があっても、自分の国に帰りたいと願っているのです。難民というのは自分の国から逃げたくて逃げてきたと思っていたのですが、そうではなく、どうしても逃げなければならない状況になって逃げてきたのであったと知りました。

ステージの上で、一度も笑顔を見せなかったのも気になりました。

2. ウガンダの Polline Akello さん

ほかの人と比べものにならないくらい、伝えようとする気持ちが本当に強かったからです。この人が目にしてきたのは、たくさんの出産中に亡くなっていく若い女性や、レイプの被害にあう女性、児童婚、暴力などでした。また彼女自身も、12歳のときに誘拐され18歳で逃げ出すまで暴力を振るわれ続けました。私は、彼女にインタビューをさせていただきました。

「あなたが世界を変えるために最も大切だと思うことは何ですか？」

「私が世界を変えるために必要だと思うことは、経験を伝えること。とにかく声をあげなさい。もう私たちは、死んでいく人々を見て黙っていることはできない。暴力を振るわれている女性を見て黙っていることはできない。戦争に巻き込まれ、当然の権利を否定され学校に行けない子どもたちを見て黙っていることはできない。私たちやあなたのような、若い女性が一緒に立ち上がって、戦わなければならない。みんなが学校に行けて、権利を大切にもらえる世界になることがゴールだね。私が声をあげ、経験を伝えることで、その声が誰かに届く。そうすればそこから輪が広がって、支援になっていく。こうして人を助けるんだよ。チャレンジや困難はたくさんある。だけどそのときに強くならなければいけない。あなたは学校に行ってる？ 日本の子どもたちはみんな学校に行けるの？ だったら、あなたは日本に帰ったら、自分の学校であなたの経験を伝えなさい。第一歩はそこから。」

といった強い言葉をたくさんいただきました。声をあげる大切さ、事実を伝えることの重要性に気付かされました。

3. 北朝鮮パク・ヨンミさん

日本から近いところにある国だからこそ、興味がありました。しかし日本で見ると北朝鮮のニュースは国のトップの金正恩のことばかりです。北朝鮮の飢餓率が30%を超えていることを知っていますか。国民が、飢餓に苦しみ、光のない真っ暗な世界で生活していることを、私は知りませんでした。

パクさんは自分の子ども時代の生活や、260ドルで人身売買をされたこと、13歳で中国へ、15歳で韓国へ逃げたときのことを鮮明に覚えていました。だからこそ話に現実味が加わってさらに印象が強かったです。

「私は恐怖と飢えと暗闇のなかで育ちました」「中国に逃げて一番初めに見たのは、母がレイプされているところでした」「北朝鮮では愛情を表現することが許されていません。政権への愛しか表現できないの

です」「私は自由というのが何なのか、どういうことなのか分からなかった」「中国で広告というものを初めて見て、ミルクの広告で、ミルクが牛からできたものだと初めて知りました」「そこの人々は、イヤリング、ハイヒール、北朝鮮では禁止されているものをみんな身に着けていました」

開催地イギリスの人や参加者の多くのヨーロッパ人からすると、日本も中国も韓国も北朝鮮も全部同じ、極東でしかない。それからこういう貧困や飢餓などで困っている人の問題に関しては、アフリカや別のアジアの地域のほうに目がいつているのも現実です。こういう場所で、自分の経験を語り一人でも多くの人に現状を知ってもらうことには大きな意味があるんだと思いました。

最後に金正恩の写真がスクリーンに大写しになったとき、

「冗談じゃない。山ほど困っている人がいるのに……。」と言い泣いていました。

会場にいる人一人ひとりに大きな印象を与えていました。私もその一人です。

この3人のスピーカーに共通して言えるのは、自分自身の辛い苦しい体験をあえてこの場で話していることだと思います。忘れないことに間違いないけれど、ここで声に出してたくさんの人に伝えることで世界は変わっていくんだと思いました。

忘れないこと What I will never forget

- ・ 経験や考えを発信すること、声をあげることの大切さ
- ・ 世界に仲間ができたこと
- ・ 今第一線で活躍している女性がたくさんいて、その人たちは次世代リーダーとなる私たちに大きな期待をよせていること
- ・ 自分を信じることの大切さ
- ・ 自分の意見をもつことの大切さ
- ・ どんなにつらいことや困難なことがあっても、自分次第でのりこえられること
- ・ ガールスカウトには世界を変える力があること
- ・ 必死に食らいついていくことで得られるものは大きいということ
- ・ 言葉には人を動かす力やエネルギーがあること



学んだこと（自信、技術、インスピレーション）を社会を良い方向に変えていくための努力にこれからどう生かしていくか

How I will channel the confidence, skills and inspiration I have gleaned into my efforts to drive positive social change

まずは、この経験を通して学んだこと聞いてきたことをできる限りたくさんの人に伝えることです。効果的なプレゼンテーションの仕方も、Be the Change Programmeの中で学んできました。

私は今自分でも分かるくらいに自信に満ち溢れています。この三日間のプログラムとサミットと、仲間のおかげです。今なら何でもできる力とエネルギーがあるように感じます。

今までの私は、何か行動を起こしたいとぼんやりと考えていて、それもあって何度もギャザリングに参加したりしてきましたが、そこで言われていた「一緒になら世界を変えられる」「少女が力をつければ世界を変えられる」などの言葉の意味が分かりませんでした。しかしこのプログラムとサミットへの参加、そしてスピーカーの方々の話を聞くことや、世界を変えるために活躍している女性と実際に話をすることで、今までの人生で一番勇気づけられました。具体的なアイデアやヒントを得て、自分にもできることがあると分かりました。そしてこれこそが、力をつけるということなんだと思いました。これは今回のサミット参加で得た一番大きな成果です。

周りに日本人が一人もいなくて、アジア人も私を含めて2人、英語を母国語とする人たちに囲まれて、全部が英語、自分は最年少、という環境にひとりぽんと放り込まれた私。最初はみんなが何を言っているのか本当に分からなくて、自分だけ英語が話せないと思い込んであまりみんなと話せず、正直帰りたいたと思っていました（あくまで最初の話ですが）。

自信を失って気持ちが折れそうになっていたそのときに、ガールスカウトの仲間を含め心から尊敬する、カッコいいと思う女性との出会いがたくさんありました。一人ひとりとの出会いが私にいい影響を与えてくれて、自信をつけてくれました。

また、世界を見ることで、今まで日本では当たり前だったことが当たり前ではないこともたくさんわかりました。たとえば多くの日本人はSNSを有効に使っていないことや、日本の高校生の容姿への自信の低さ、そういう小さなことから、大きいことでいえば日本人の問題意識のなさ、英語教育やリーダー育成プログラムの目指すレベルが外国に比べて圧倒的に遅れていること（先生たちごめんなさい）などです。

日本中で、このプログラムやサミットのことを伝えられるのは私ただ1人です。参加者のなかで、日本語で情報を広めることができるのは私しかいません。私が広めなければ広まるきっかけすらありません。また、この経験をしてきたということ自分の強みとして、学校やガールスカウトの中でのロールモデルになっていきたいと思っています。まずは私の身の回りの人の意識から、今回の経験を伝えることで変えていきます。

この経験を#NoLikesNeeded や low body confidence にどうつなげていくか How I can link that to #NoLikesNeeded and low body confidence

#NoLikesNeeded について

これは、Dove の Self-Esteem Project のキャンペーンの一つです。#NoLikesNeeded を私なりに訳すとすれば「いいね不要」。SNS に写真をあげて、もらった「いいね」の数で自分の価値を決めてしまう人がいます。どんな写真をあげたら「いいね」してもらえるかと考えて、自分がどう思っているかではなくそれを見た人がどう思うかを中心に考えているのです。

このタグが意味するのは、「この写真は私がとても気に入ってここにあげたのだから、それを見てあなたたちが『いいね』しようがしまいが関係ない。『いいね』の数は私の価値じゃないから」ということです。

この話題は、学校の友達に絶対に伝えたいことのひとつです。私の日本の友達はみんな SNS を使っていますが、それにとらわれています。また、有効に使えていません。身近な人とのコミュニケーションを楽しむことが多いです。SNS を通して日本の社会が注目することといえば、がんばっている人はすごいことをしている人よりも、冗談半分でそういう人たちを批判する意見のほうが多いように私は感じます。

日本人は、「かわいいね」と言われるとほとんどのひとが「そんなことないよ」と言います。うれしくてもありがたいとも言わず、お互い褒め合うか、謙遜するかです。でもみんなかわいいと思われたくて、そのためにおしゃれな服を着たりメイクをしたりわざわざプリクラをとったりします。SNS にその写真を載せて反応を待ちます。写真は必ずと言っていいほど加工されていて、それが当たり前です。そうしてみんな、もっとかわいくなろうとか、もっとやせようとか言います。Body Talk (体や能力についての会話) が友達との会話の大半を占めているといっても過言ではありません。

それから、キャラを作るというのも高校生にはありがちです。いや、言ってしまえば高校生みんなそうです。親にこう思われたい、先生の前ではこんな生徒に見られたい、クラスの中では私はこういうキャラだからこうしよう、絶対みんなそんな気持ちは心のどこかにあると思います。他人とはいえ今あげたような、よく自分のことを知っている人からどう見られているかはどうしても気になるもので、それは仕方ないことなのかもしれません。でも、その像に無理に近づこうとすることは違うと思います。

私はもう、「人にどう見られているか」ととらわれるのは、やめるべきだと思います。ありのままの自分に自信を持って好きだと思えることの幸せと自由を理解したからです。

人から見られることを気にするというのは、日本の、とくに女子高生には本当によくあることです。これを私がきっかけとなって変えることができれば、学校はもっと過ごしやすく、他のことにも目が行くようになって、視野が広がると思います。視野が広がれば、そこから問題をみつけて、意見を発信することや、解決策を考えることもできます。世界を変えよう、リーダーになろうと思うためには、自分に自信をもつことが第一歩かもしれません。この三日間で私はその一歩を踏み出すことができました。



最後に

印象に残った言葉

「将来は、男性が国会議員になんてなれるの？ って世の中が言うような、そういう世界にしたい」

By Nicola Sturgeon MSP

「ロールモデルがいないと世界は変わらない」 by Kangana Ranaut

「私の国で好かれる女性像は、静かで、将来の事は話さず、家族の言うことを聞いて、人形のようにしていることです」 by Sonita Alizadeh

「一番大切な旅は、自分自身の旅」「何があろうと自分を愛しなさい、欠点や弱点も全部含めて」

「精神病やうつ病は、恥ずかしがることではないわ」 by Cara Delevingne

「父が私の姉妹にできなかったことを、私が娘にしてあげるんだ」

「今までマララは、自分の身に起こったことに対して文句を言ったことがない」

「子どもたちは、私たちがすることを見て学ぶ。教えたことではない」 by Ziauddin Yousafzai

「私たちはみんなフェミニスト（女性解放論者・男女同権主義者）よ。学校に行って、仕事が欲しくて、それから平等なチャンスを探してる」「あなたがフェミニストじゃないのなら、あなたがこれから生きようとしているのは退行していくばかりの社会ね」 by Sharmeen Obaid

このほかにも、ここには書ききれないくらいたくさん印象深い言葉がありました。

事後の活動、今後の展望

ロンドンから帰って久しぶりに学校に行くと、たくさんの友達や先生方が「おかえりー！ お疲れ様。また話聞かせてね！」とってあたたかく声をかけてくれて、とてもうれしかったです。Twitter や Facebook などで随時現地から、今何をしているかなどの投稿をしていたためか、みんな私がどんなことをしてきたのかにとっても興味津々でした。

帰ってきた直後の学級活動の時間をまるまる 1 限使わせてもらい、ガールスカウトの制服を着て、クラスメイトへの報告会をしました。45 分間の間に、簡単なスライドや写真を使ってプレゼンテーションと、私への質問から発展してディスカッションをしました。

プレゼンテーションでは主に、サミットで何をしてきたかや、ガールスカウトについて簡単な紹介、私が見たイギリス・ロンドンの話、そして私が日本の高校生に一番伝えたかった自己肯定感を高めることの話などをしました。

自己肯定感の話と、海外に行って、日本を改めて見て私が感じた日本の問題については、クラスメイトも特に興味を持って話を聞いてくれました。

質問タイムやディスカッションでは、普段みんながそんなことを気にしているとは思ってもよらなかったような、日本の女性の社会進出の関する政策についてどう思うかとか、自分たちの生活のなかで、自己肯定感を高められない要因は何で、それはどうすれば解決できるのかなど、深いトピックがたくさん出てきました。

いつもはそのような話をわざわざクラスメイトとすることもないので、良い機会になったかと思います。また、私の周りの環境というのは、意見を発信した時に素直に受け入れてくれるものなんだな、と思いました。Polline Akello さんへのインタビューにあった言葉や、マララさんの活動を考えると、私は今とても声をあげやすいところにいるということが分かりました。

先日は奈良テレビ放送「ゆうドキッ！」(毎週月曜日 17:58~18:54) に出演させていただき、また、私の住んでいる広陵町の町長とお会いしてお話もしました。

この経験をまずはたくさんの人に知ってもらうため、私の活動はまだまだ続きます。

将来については、こんな仕事がしたい！ というのはまだ具体的には決まっていません。しかし今回の経験で 1 つ明確になった夢があります。それは、国際社会で働くことです。そして、日本と世界に新しいつながりを作りたいと思います。

ロンドンで出会ったような、私にもものすごい影響を与える人がまだ世界にはたくさんいると思うと、とてもワクワクします。とにかくさまざまな人に出会いたいというのが理由の 1 つです。

それから、私の活躍できるフィールドは、日本だけではなくもっともっと広いということに気付きました。どうせなら、広いところで活躍したいと思います。世界を意識して視野を広げ、知らないことを知るのとはとても面白いです。新しい知識を自分の頭で考えて形にしていくことは、私はとても素敵なことだと思います。この気持ちを、日本にいながら感じることができるような、日本と世界をつなぐ方法を考えていきたいです。

どんな分野であれ、ロンドンでの経験を忘れずに、広い世界でたくさんの人と一緒に仕事がしたいと考えています。

私は日本の代表、ガールスカウト世界連盟の代表としてあの場において、Generation Girl の名を背負って帰ってきました。これから世界を変えるために動いていきます。いや、むしろ動かないという選択肢はないと思っています。

この三日間の素晴らしいプログラムに参加させていただくことができたことを本当に誇りに思います。日本では絶対にできない経験でした。英語を話すことがやはり周りのみんなに比べると明らかにできなくて、日本の事とか自分の感じたこととか言いたくても言えなくて(アンケートも日本語で書いてしまったし)、悔しい思いもありますが、本当にいい経験だったことには間違いありません。この文章からも感じていただけたらうれしいです。

私にこのようなチャンスと、素晴らしい出会いをありがとうございました。

2015 年 10 月